

# 古筆切拾塵抄・続(三)

——入札目録の写真から——

小島孝之

はじめに

前稿に続き、肥前島原平戸藩松浦家の入札目録の中から前回取り上げなかった昭和六年十月二十六日入札の『松浦伯爵家藏品入札』と昭和九年十一月五日入札の『松浦伯爵家藏品展覧入札』の二冊を対象にしたい。ただし、この兩年の目録には昭和二年度の入札に出品されたものが多数含まれている。二年の入札では目標額に届かず親引きになった品が多かったことが伺われる。入札史を考える上ではなかなか面白いテーマではあるが、古筆切の新出資料を探る上では有り難くない事実でもある。

前回までは、『古筆学大成』や『古筆切資料集成』にすでに翻刻が掲載されていて、翻字の誤植もないと思われるものについては、あらためて翻刻本文を掲げることとはしなかったのであるが、幾人かの方から、翻刻本文も載せていないと判りづらいついご批判をいただいた。掲載した複写写真が小さすぎるといご指摘も承った。今回はその点も多少は改善したいと思う。なお、歌に付した番号は『新編国歌大観』『私家集大成』の歌番号である。墨蹟・消息の類は今回も割愛する。

## 一 昭和六年の入札目録

昭和六年十月二十六日に入札が行われた『松浦伯爵家藏品

入札」目録に掲載された写真から見ていこう。

「四 実朝 中の院切 いまはただ」として、「中院切」の大きな写真が掲載されているが、すでに昭和二年度の入札に出たものであり、かつ、『古筆学大成』八巻にも収録されている。東京国立博物館に現在所蔵されていることも前回すでに述べた。以下、前回触れた事柄は省略することとしたい。

「七 頼政 平等院切」も昭和二年度に既出。

「八 弘法大師 南院切」は『新撰類林抄』の断簡である。

本書は零本が残存している他には若干の断簡があるに過ぎない。まとまったものとして、村田正博・栗城順子編『林学士集・新撰類林抄 本文と索引』<sup>(注1)</sup>があり、零本の四十首と断簡三葉四首の翻刻が提供されているが、本断簡は収録されていないかった。しかし、久保木秀夫氏の「伝空海筆南院切『新撰類林抄』断簡」と題する論文において、南院切の断簡が博搜され、写真と翻刻が掲載されている。この松浦家の目録の写真も紹介されているので、重ねての紹介は不要であろう。

「九 夢窓国師 多賀色紙」五言絶句を四行に書いている。

春名好重氏の『古筆大辞典』には、『新撰古筆名葉集』に

「草書、五言絶句、金銀砂子」と見えている。『三浦色紙』と同じものである。料紙は楮紙、縦一九・一センチ、横一六センチ、金・銀の砂子を霞に撒き、切箔・野毛をやはり霞に置いている。手鑑『見ぬ世の友』に押されている『三浦色紙』は五言絶句「猛獸諸居側、禍鳥鳴一提、体留此野美、魂為何処帰」を草書で四行に書いている。行の長さは一七センチばかりで、行間は広くあいている。字形は大体整っていて、巧妙に書いている。筆者は夢窓疎石（一二七五～一三五二）といわれている。しかし夢窓疎石の真跡とは認めがたい。」と解説されているが、右の『見ぬ世の友』は『藻塩草』の誤りであり、引用された五言絶句も『藻塩草』中のもの。『見ぬ世の友』には「多賀色紙」も「三浦色紙」も貼られてはいない。そのケアレスマスを除けば、右記の説明はおおむね妥当であろう。田中塊堂編の『昭和古筆名葉集』にも、「草書五言絶句金銀砂子」と記される。しかし、実際にどこにあるかとなると案外少なくて、今までに管見に入ったものは、『藻塩草』のものと、三井文庫蔵『筆林』中のものと、当該松浦家旧蔵の三点に過ぎない。『筆林』複製の解説に記すごとく、『藻塩草』に付属する古筆了伴による筆者目録では、一旦「多賀色紙」と書いた上

で、これを塗り消して、「三浦色紙」と訂正している。この切名の変更がいかなる理由によるのかは全く不明である。

『筆林』には、古筆了信による目録が付属しており、そこには「三浦色紙、多賀色紙」と両方を書いている。五言絶句とは言うものの、読解には大いに困惑せざるを得ない。

ここには図版のみ掲げ、然るべき専門家の読解に俟ちたいと思う。(図1)

「一〇 明恵上人 夢記」は絵入りの興味深いもの。「竪一尺 幅一尺四寸九分」とある。詳細は専門家に任せて、これも写真のみを掲出しておきたい。(図2)

「一一 家隆 歌切」は、「伝家隆筆中院切千載集」の断簡で、昭和二年度の入札に既出。

「一二 西行 歌切十八首」は、「卷子本曾丹集」(一三〇五～三二二番)の断簡で、『古筆学大成』に図版と釈文を収録済みゆえ割愛する。

「一三 定家 三首懐紙」は「江月聞雁・夜風似雨・似忍増恋」の三首であるが、同じ三首を書いて、作者の名まで書いたものが同様に他の入札目録に出ている。この断簡については、昔「藤原定家の詠草覚書」という拙論で紹介したが、その後、田村柳壹氏が詳細に論評を加えておられる。<sup>(註七)</sup>

田村氏は慎重に結論を控えておられるが、私は田村氏の紹介した他の二葉の同内容の懐紙を勘案して、当松浦家旧蔵懐紙は、田村氏が推測されたように模写であると考えたいと思っている。

一四以下にも懐紙や書状、色紙、短冊などが多数続いて掲載されているが、それらはすべて省略する。

「六七 定家 宴座帖」なる小冊子の表紙と見開き写真がある。定家のいわゆる「小記録」である。これから離れたものの内に、世間で「定家筆小記録切」とされているものがあるのではなからうか。また、この冊子が今も現存している可能性は高いと思うが、詳しくは追跡していない。写真だけ転載しておこう。(図3)

「六八 為家 古今集帖」。枡形の小本らしい。これもおそらく現存するのではないかと思う。(図4)

「六九 二条為氏 唐鑑／二条為秀 桐火桶」。四半本の『唐鏡』と枡形本の『桐火桶』である。(図5)

「七〇 良経 伊勢大輔集」四半本らしい。『新編国歌大観』の底本とされた旧桃園文庫蔵で現在東海大学図書館蔵の伝良経筆『伊勢大輔集』なのであろう。(図6)

「七一 寂蓮 仮名法華経」。春名好重『古筆大辞典』に

「仮名法華經（寂蓮）」として解説されているものがこれである。とすれば、これも現存しているはずである。（図7）

七四以下には「天平写経」等が続くが割愛する。

「七八 坊門局 為信集巻」。これは、現在、天理図書館に所蔵されているので、写真は割愛する。

七九、八〇と、松花堂の「瀟湘八景詩歌」、光悦の「詠歌大概」があるが割愛する。以上が昭和六年の分である。

## 二 昭和九年の入札目録

次に昭和九年の目録に目を移そう。初めのうちは墨蹟が続くがすべて省略に従う。

「一五 佐理 和歌五首 おほそらに」とあるのは、有名な「五首一紙」のこと。昭和九年のこの入札に際して一首ずつに分割され、「蓬萊切」と命名されたことはつとに有名である。複製や図版は多数作成されているので、割愛する。

「一六 俊頼 色紙 山たかみ」。俊頼の色紙といえ、時に公任筆とも極められるいわゆる「大色紙」が代表的なものであるが、その他にも幾種類もの色紙が伝俊頼とされて

いる。しかし、本断簡のツレになるようなものは他に存在を知らない。そもそも、筆跡も通常「俊頼」とされるものとあまり似てもない。そういう意味では、研究上の意義があるとは思えないのだが、『古筆切資料集成』にも翻刻があつて、他と混同されてもいけないので、図版を掲げておくことにしよう。（図8）

「一七 俊成 四半切歌切 けふのみと」。いわゆる「伝俊成筆枅形本古今集切」であるが、すでに昭和二年の松浦家の入札に既出。

「一八 家隆、定家 本能寺切 いそちかき」。これも「一七」と同様既出。

「一九 良経 朗詠切 おほそらの」。いわゆる「伝良経筆大字和漢朗詠集切」であるが、これも右と同じく既出。

「二〇 定家 歌切 松浦山」。藤原定家の最勝四天王院障子和歌の草稿懐紙の一点。『古筆学大成』には、陽明文庫所蔵の「泊瀬山」の懐紙と、個人蔵手鑑「筆林翠露」所収の「宇治河」の懐紙が掲載されている。他には、『日本書流全史下』に尊経閣所蔵手鑑「野辺のみどり」所収の「武蔵野」の一枚が掲載されるのみで、本懐紙は図版の紹介がないようであるので、ここに掲げておこう。なお、他

にも入札目録類には、「春日野」や「難波」の懐紙がある。

(図9)

〔四五 古筆手鑑〕に五点の断簡が貼られており、右頁に掲げられる見開きの二点は既に昭和二年の目録に既出。ただし、左頁に掲げられる見開きの三点は昭和二年のものには載っていないので、次に略述する。

1. 「日本能書佐理卿」という古筆別家の印のある極札を付す漢字一行。「双樹煙消之昏」とあるが、佐理は単なる極めに過ぎないと思われるゆえ割愛する。

2. 「藤原佐理卿 てるまへに」という古筆別家（おそらく三代了仲か）の極札を持つ「紙撚切」『道濟集』の断簡。これは『古筆学大成』が、この松浦家の入札目録から写真を転載しているので省略する。

3. 「権大納言行成卿」という小札を付す「伝寂蓮筆胡粉地切」。これも『古筆学大成』が当該目録から写真を転載し、翻刻は『古筆切資料集成』にもあるので、やはり割愛する。

〔四六 古筆手鑑〕は、色紙を見開きに一葉ずつ貼る小型の手鑑で、見開き二面の写真が載る。上段右頁のものは、「後醍醐天皇」という小札を付す「吉野切」。これは『古筆

切資料集成』に翻刻がある他、伊井春樹氏の論考<sup>(注5)</sup>にもあるので割愛する。上段左頁のものは、「後京極良経公」という小札を付す色紙。内容は『新古今和歌集』巻五(四三七番歌)の散し書き。『古筆切資料集成』に翻刻はあるが、図版の紹介はない。これと類似の『新古今』を散し書きにした色紙が数枚、入札目録類にあるが、ツレか否かの判断の材料として取り敢えず松浦家のものを掲げておく。(図10) 下段の写真は昭和二年の目録にもあり、前稿に詳述したので割愛する。

〔四七 古筆手鑑〕。上段に見開き3葉、下段に見開き4葉が掲載されているのだが、不思議なことに『古筆学大成』はその一部を転載するだけである。以下に略記する。

1. 「民部卿局」という極札(二代朝倉茂入であろうか)を付す「狭衣物語」の断簡。『古筆学大成』に掲載。その後、大垣博氏蔵として、『古筆への誘い』<sup>(注6)</sup>にも掲載されている。通常は、伝二条為明筆の「狭衣物語切」の(二)とされているものである。

2. 「坊門局」の極札(五代了珉あたりか)を付す「小松切」。『拾遺抄』巻三の二一六―二一八番。これは『古筆切資料集成』が取り上げているだけで、『古筆学大成』は触

れていない。よって、写真を転載する。(図11)。翻刻は左の通り。

こ、にたにひかりさやけきあきの月くものうへこそ  
おもひやられる

同御時

躬恒

いつこにかこよみの月のみえさらむあかぬは人の心  
なりけり

屏風に

平兼盛

よもすからみてをあかさむあきの月こよるは  
そらに雲なからなむ

3. 「三条院女蔵人小大君」の極札(二代朝倉茂入か)を  
付す「御蔵切」『元真集』一三五〜一三七番の断簡。『古筆  
学大成』を初め、あちこちに写真が載っているから割愛す  
る。

4. 「行成卿」の極札(「養心」印。神田氏)を付す「観普  
賢経」の断簡。金銀を一面に撒いた料紙に金界罫を引き、  
墨書した経切。伝行成筆の経切に同筆のものは見いだせな  
いが、時に「行成」ともされる「伝道風筆愛知切」に似て

いる。しかし、「愛知切」と断ずるのも難しい。とりあえ  
ず写真の転載のみ掲げておく。(図12)

5. 「中納言定頼卿」の極札(五代了音か)を付す「烏丸  
切後撰集」の断簡で、『古筆学大成』に所収。よって割愛  
する。

6. 「四條大納言公任卿」の極札(末田幽視)を付す「仮  
名観無量義経切」。『古筆手鑑大成』に当該写真の転載があ  
るので割愛する。

7. 「藤原顕輔」という極札(木村見室であろう)を付す  
「鶉切」『古今集』巻一七の八九五〜八九七番歌の断簡。こ  
れは何故か、『古筆切大成』は积文のみを載せる。よって、  
ここに写真を転載する。(図13) 翻刻は後掲。

「四八 伊勢物語帖 後柏原院/後奈良院 御両筆」とある  
が、割愛する。

「五三 定家 記録 巻物」。これは『明月記』安貞元年八  
月からの巻物で、現在、天理図書館に所蔵されている。  
五四以下に「大江山絵巻 二巻」等があるが、絵巻は割愛  
する。

以上で、松浦家の三回にわたる入札目録のうち、図版未紹  
介の古筆切はほぼ提供できたと思う。

- (注1) 村田正博・栗城順子編『翰林学士集・新撰類林集 本文と索引』(和泉書院。平成四年一月)
- (注2) 久保木秀夫「伝空海筆南院切『新撰類林抄』断簡」  
『奈良・平安期の日中文化交流』所収。農山漁村文化協会。  
平成一三年九月
- (注3) 拙稿「藤原定家の詠草覚書」(『実践国文学』第一七号、昭和五五年三月)
- (注4) 田村柳壺「定家の懐紙三種について」(『後鳥羽院とその周辺』所収。笠間書院。平成一〇年一月。初出は昭和六〇年六月)
- (注5) 伊井春樹「伝後醍醐天皇筆吉野切考―堀川百首初撰本としての性格―」(『語文』第四七輯。昭和六一年四月)
- (注6) 国文学研究資料館編『古筆への誘い』(三弥井書店。平成一七年三月)

(こ)しま・たかゆき 成城大学教授

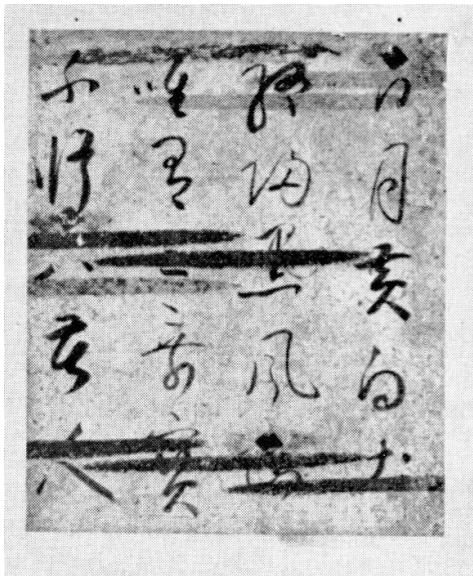


図1

京又三寸  
 十月十日 衣多と云へり 致さば  
 子し 帳中 有 鶴舞 戸 牙 破 乳  
 鳥子ノ尾 芳人ノつこりタルヤト云  
 中ニシク 羽ノ 鳥子ノ 羽 籠 籠 籠  
 信白 雄 鳥 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠  
 又有一子 鳥トト 鳴 子 在 大 家 中  
 子 心 し 又 見 拜  
 因 此 年 月 日 手 羽 也 羽 子 羽 子 羽 子  
 限 三 味 飲 種 中 亦 有 七 火 光 文 明  
 三 龍 子 羽 子 二 角 任 五 寸 十 高 三 寸 寸  
 七 寸 子 羽 子 又 七 寸 羽 子

図 2



平座ニ云  
 公御看伏座  
 今日出仕公御下白重也又務  
 是時年人儀 重老ノ人  
 月御座留  
 藏人儀 無出座也  
 昨一上者 昇 宴座 伴 又  
 再 到 不 出 給 儀 行  
 重 湯 日 上 同 指 踏 年  
 侍 信 亦 丁 給 菊 柄 也 委 同  
 藏 人 同 御 無 出 出 給 託 信 舟  
 上 御 出 舟 伴 且 陽 儀 重 老  
 昨 宴 座 出 管 人 信 舟 御 舟  
 舟 同 儀 重 老 儀 承 也  
 人 重 年 里 内 和 舟 才 重 老 直  
 同 儀 也  
 信 繁 儀 御 舟 不 合 出 給 儀 舟  
 次 舟 中 好 重 老 儀 也

図 3



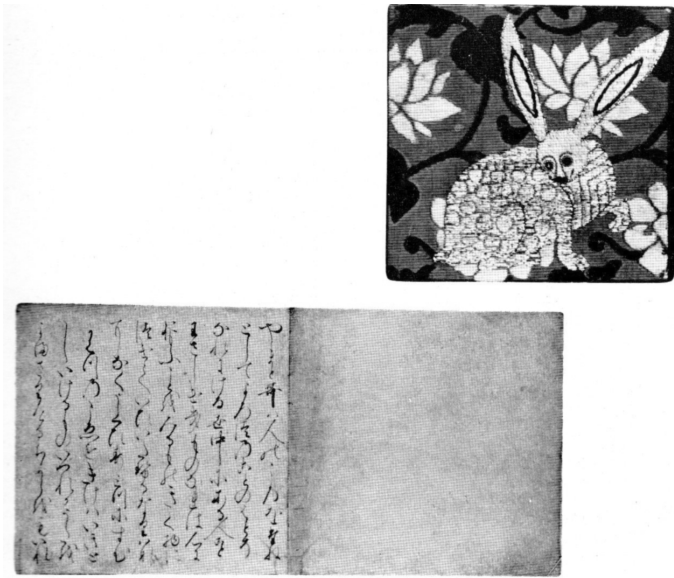


図 4

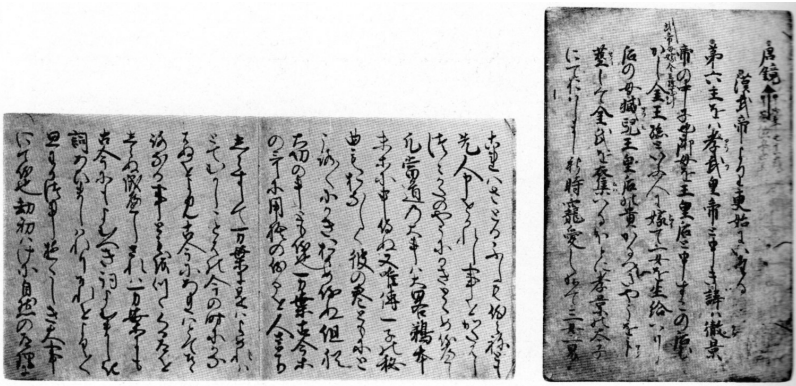


図 5



図 6

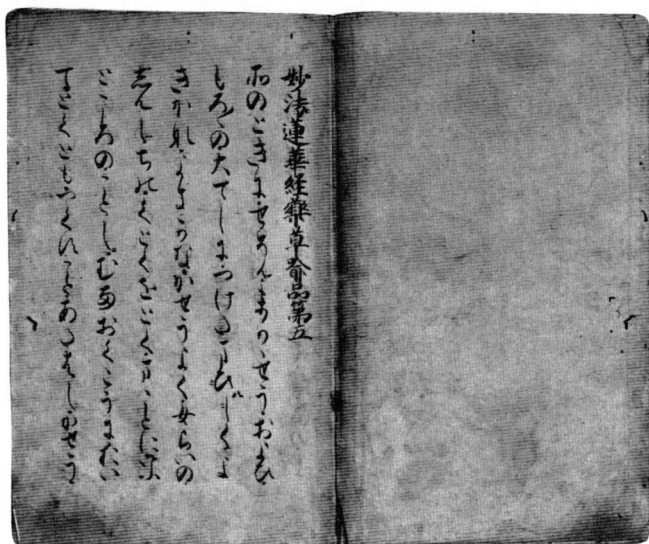


図 7



図 8

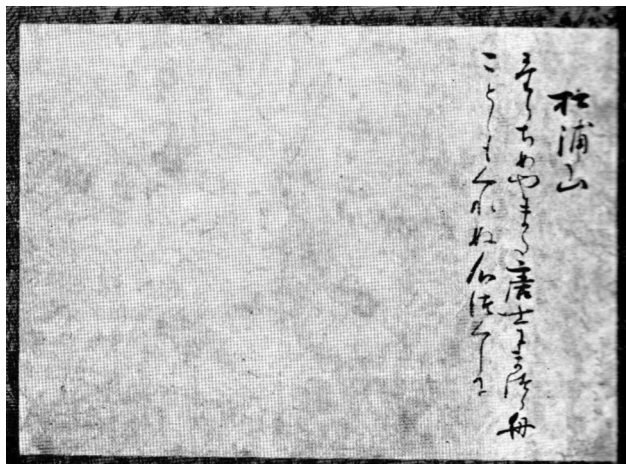


図 9

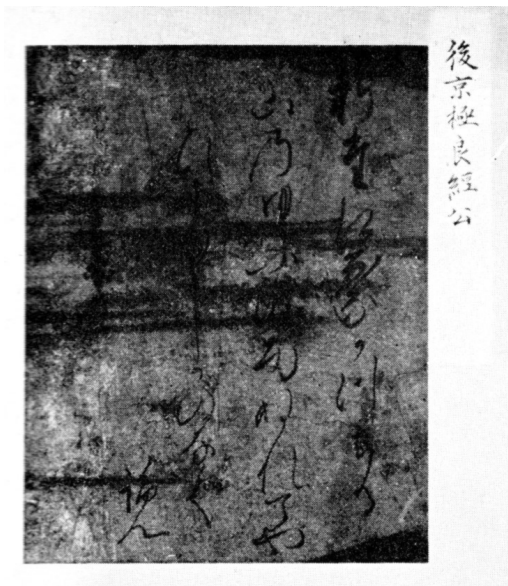


図10



図12

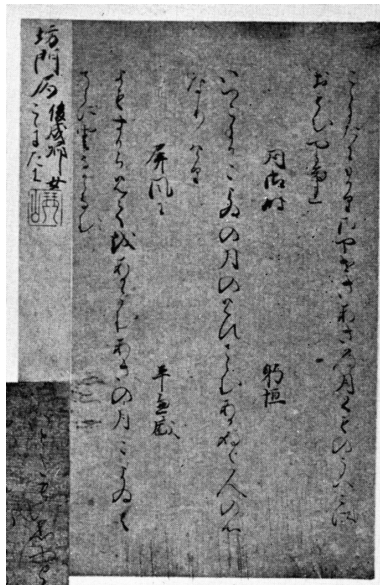


図11

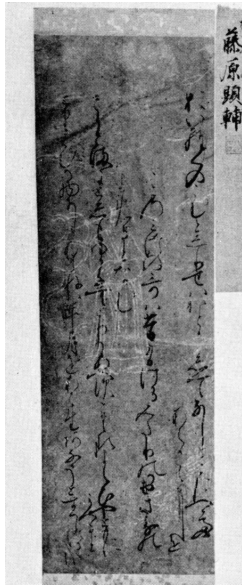


図13

翻刻は次の通り。

おいらくのごむとしりせハかとさしてなしとこたへて

あはさらましを

このミつの哥ハ昔有けるみたりのおきな

よめるとなむ

さかさまにとしもゆかなむとりもあへすゝくるよはひやとにも

かへると

とりとむる物にしあらねハ年月をあはれあなうとすくしつる哉

いささか判読に困難を感じる部分なきにしもあらずであるが、写真をモニターの画面上で拡大して解読しえたと考えている。